

恩師に再会す

「先生、おかげ様で東邦大学に入学できました。ありがとうございました。」

6月某日、1年生の講義を終え、パソコンの後始末をしていた私は不意に声を掛けられ顔を上げた。私の前に緊張した面持ちで立っている学生の顔を眺め、記憶を手繰っていた。

「面接ではありがとうございました。」

あ、思い出した。あの子か。まさか・・・。

弘前城の北に今も残る「養生幼稚園」は、武家屋敷をそのまま利用した幼稚園で、長い歴史の静粛を感じさせる佇まいをみせている。津軽藩士伊東広之進邸を藩医のひとりであった伊東家久の子、伊東 重が購入して始めた養生幼稚園は明治39(1906)年に設立された。日本最初の幼稚園である東京女子師範学校(お茶の水女子大学)附属幼稚園が設立されてから30年後のことであった。東京帝国大学を卒業して弘前に開業した伊東 重は体力・智力・精神力など人間本来の力を修行や教育で引きだそうとする「養生主義」を掲げ、養生幼稚園を興した。ここには、開園の54年前、嘉永5(1852)年に吉田松陰も訪れている。これは伊東広之進が憂国家として、藩外まで聞こえていたからである。またここには、伊東 重の東奥義塾の同窓生であった陸 羯南の書が納められている。

名山出名士(名山名士ヲ出ダス)

此語久相伝(此語久シク相伝フ)

試問巖城下(試ミニ問フ、巖城ノモト)

誰人天下賢(誰人カ天下ノ賢ナルゾ)

秀峰岩木山がみえる津軽から、一体どんな人材が出ているのか。陸 羯南は津軽の後輩に奮起を促していたのである。私は弘前高校の体育館を走り廻っては時折この書を見上げ、何となく心地よさを感じていたような気がする。しかし、50歳を過ぎて大学教員の立場になると、何とも辛い書である。

津軽藩は廃藩置県により幕を閉じたが、藩校稽古館に代わる教育機関の設立が急がれた。最後の藩主、津軽承昭は明治新政府の影響が懸念される官立を避けて、「私学」を選んだ。これが東奥義塾である。藩士、菊池九郎が薩摩私学校、慶應義塾にて私学の教育精神を学び、津軽の教育再建

に向けて「私学」を選択すべきと主張。承昭が賛同し、莫大な私財が投じられて東奥義塾は明治5(1872)年に設立された。津軽藩は敢えて私学を選んだのである。

そもそも、津軽は「日本書紀」にも記載されている。それによると、蝦夷の中で最も遠い「都加留」は独立の気配が濃厚で、戦でも負けることを知らない。律令制に反発し、すでに水田を持ちながら、敢えて稲作を行わず、独自の生活文化を築き、頑として独立の姿勢を崩さなかった。弘前高校の先輩、太宰 治は小説「津軽」にこう書いている。「弘前の城下の人たちには何が何やらわからぬ稜々たる反骨があるやうだ」。

母校、弘前高校は東奥義塾に遅れること12年、明治17(1884)年に青森市に創設された。県立高校ではあるが、陸 羯南の書を掲げて教育を行っていた。津軽藩が明治維新で選択した「私学」の矜持を胸に秘めた学校であったのかもしれない。

大学教員として私にできることは何があるのだろうか。偏差値の高い大学を辞退してまで東邦大学で学ぶことを決断してくれた学生に対して、十分応えられるであろうか? 辞退した大学の教員よりもっと質の高い臨床・研究をしなくては、学生を落胆させてしまう。レジデント時代、尊敬する先輩の英語論文を検索し、MEDLINEでヒットしなかったときの驚愕と落胆は大きかった。東邦大学を選択してくれた学生に、同じ思いをさせてはならない。講義の後に挨拶してくれた1年生の顔を見ながら、身震いを感じていた。

その講義から数日後、「うりたくん、じゃないか」と3号館で声をかけて頂いた。振り向くと忘れもしないドイツ語の八城先生が手を振っていた。第1志望の大学に落ちて悶々とし、授業に出てこなかった私を叱咤激励してくれた先生であった。27年ぶりであった。

「私なんか教員をすることになって、申し訳ありません。」という、八城先生は底抜けに明るい声で私の手を握って言った。「いやあ、久しぶりだ。君は学生のときと何も変わっていない。安心した。いやあ、愉快、愉快。」

またしても八城先生に助けられたのである。

(総合診療・救急医学講座教授：瓜田純久)